

ムンバイ訪問 報告

2005 年 2 月 26 日 (土) ~ 3 月 5 日 (土)

~人物紹介~

- BLP —ボンベイ・レプロシー・プロジェクト—
インドの NGO、当事業インド側パートナー
- Dr.Metha (ハンセン病の専門医)
最初に BLP と私たちをつないだ 70 代の女性
- 義村氏 (元ムンバイ日本総領事館スタッフ)
当事業の協力者
- 中島岳志氏 (若きインド研究者)
ヒンディー語を自在に操り、インド人と対等に渡り合える希有な存在
- 加藤先生 (ムンバイ日本人学校教諭)
識字教育 NGO「VOICE」のボランティア

花谷 めぐむ

2 月 26 日 (土)



2 月 28 日ムンバイ名所のひとつ豪華絢爛「タジマハール・ホテル」の前で (私たちの宿はその裏の小さいホテル)

● 11:10 関空発 → 15:30 バンコク着 / 19:25 バンコク発 → 22:20 ムンバイ着 (タイ航空)

予定より 1 時間遅れてムンバイ到着。空港の近くにあるメタさん (Dr.Metha) 宅に泊めてもらう。

2 月 27 日 (日)

義村氏から譲ってもらった携帯電話だが、インド用の IC チップを入れないと動かない。メタさんの娘さんスジャータ (Sujata) さんが IC チップを購入してくれる (国内に住んでいないと購入できないそうだ)。1 度購入すれば、再充填は可能。これで、懸案の携帯電話が使えるようになった。

朝 10:00 頃、中島岳志氏がムンバイに到着。そのままメタさん宅で合流。小休憩後にホテルを探しに出かける。何軒か回って部屋を見せてもらった後、タージマハールホテルの裏にあるリージェントホテル (Ht. Regent) に決める。1 人 1 泊朝食付きで 1,100 ルピーほどで、前回のウエストエンドホテル (Ht. Westend) の 3 分の 1 の値段。部屋もそこそこで十分。ついでに、近所の様子を探る。インド門の近くのホテル街で、お店、レストラン等も多い。すべて中島氏の後について歩き、今回のインド訪問ではあらゆる面において、言葉で言い尽くせないほど彼にお世話になった。

2 月 28 日 (月)

● 10:30 モンスーン (Monsoon) 教室《光の教室》訪問



BLP と朝から試行錯誤しながら携帯電話で連絡を取る。前回と同じダダ (Dadar) 地区のホテル・プリタム (Ht. Pritam) に迎えに来てもらい、BLP のオフィスへ。BLP が行なっている身障者に対するリハビリ方法や道具、新出患者について、改めて中島さんに説明があった。スプーン等は、個人の変形に合わせてエポキシ樹脂でその場で作成する。

モンスーン教室訪問。子ども達が大歓迎してくれる。日本の小学生からのプレゼントや千羽鶴を、子ども達を書いてくれた写真付きの文章を見せながら説明する。千羽鶴の折り方を説明するために、折り紙を渡したとたんに大混乱。もみくちゃにされる。子ども達からは、日本の子ども達に手紙とビーズの作品が贈られた。



そのうちに昼食の時間。今日は、日本から来た私たちの名前でチキンの入ったカレーとビスケットが振る舞われたようだ。私たちも頂いたがとても美味しかった。



興奮のるつぽと化するモンスーン教室

姫路の小学生の写真を見せると「ジャパカ・バッチャ！」(日本の子ども!) という子ども達の大合唱が巻き起こった。



子ども達は見てもの通り、青い制服を着ている。(制服は公立学校のもので、身なりを整えると同時に子ども達を公教育にアクセスしていく上で大事な意味を持っている) この制服は、私たちの支援で支給されたもの。定期的に通って来る子ども達に支給されているようだ。

BLP から、事前に頼んでおいた子ども達の体重や身長を書いたデータを受け取った。ラオ医師 (Dr.Rao) が、定期的に健康診断をしてくれている。データに載っているのは、定期的に教室に来る子ども達で約 40 人。あとは、不定期あるいはたまたまやって来る子ども達が 30 人から 40 人。健康診断をするにしても、全員がそろうわけではなく、追跡できない子ども達が倍近くいることになる。ラオ医師は、データを取るために 2 週間から 1 カ月に 1 度、教室を訪れてくれているようだ。

データを見てわかることだが、誕生日は記載されていない。誕生日が分からない子も多いようだ。また、住所の欄を見て驚くのは「〇〇学校の向かい」「〇〇の近く」という記載がほとんどということ。そう、子ども達が住むスラムに住所はないのだ。その後改めて、病院内の厨房で昼食をいただく。

3 月 1 日 (火)

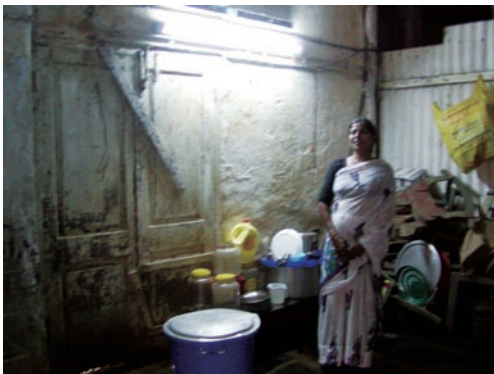
● 10:00 ～ 再びモンスーン教室訪問、及びアクウォース (Acworth) ハンセン病病院訪問



再度、モンスーン教室を訪問。今日は、授業風景を見学することができた。みんな真剣そのもの。英語の授業だった。以前に会った先生 (Ruzai) は出産休暇で、今は若いフローラ (Flora) が教えている。正面に座っているアヌ (Anu) はヒンディ語の先生。生徒が書いたノートなども見せてもらった。

また、近くの公立学校の先生も定期的に教室をのぞいてくれているようだ。サンギータ (Sangeeta) 先生で、この教室から公立学校に行く予定の子ども達の様子を見てくれている。

今日の献立は豆のカレー。以前来たときに真っ暗だった台所に、大きな蛍光灯がついた。これも大きな収穫だった。



以前に会った絵の好きなスシーラ (Sushila) はここアクウォースがダラヴィから遠いために通いきれないようだ。将来的に BLP の担当地区であるダラヴィに学校を作るという話はどうかと打診してみた。また、絵の先生であったスリニバサン氏 (Mr.Srinivasan) は、胃ガンが進行しアクウォース病院内の病棟に入院していた。ガン病棟を追い出されてアクウォース病院のチマルギー院長 (Dr.Chimalgi) が引き取った形。やせ細って痛々しかった。(後日 BLP からメールが来て、スリニバサン氏が 3 月 9 日に息を引き取ったとのこと。ご冥福をお祈りします。)

その他に BLP から出された提案としては、教室で日本語あるいは空手か何かを教えたいという。日本語に関しては、子ども達に無理強いするのは嫌なので、気が進まない旨を伝えた。ただ、加藤先生が VOICE でやっているような少林寺などは、自己防衛にもなるし男女関わらずできるので、BLP はぜひともやりたいようだ。加藤先生は日本に帰られるため、適任者を捜してみることを伝えた。

チマルギー院長を交えて昼食を取った後、パラチャム見学のため移動。

● 15:30 ～ パラチャム (Paracham) 訪問

パラチャムは、ウォルリ (Worli) 地区のジャジャマータ・ナガール (Jajamata Nagar) で活動している識字教育 NGO である。ここは、スラムとはいえ、ちゃんとしたブロック塀の家が建ち、お店や移動遊園地がある比較的余裕のある地区のようだ。スラムの入口あたりはムスリム居住区。奥に行くに従ってムスリム以外の住民が混在する。





ここの特徴は、ともかく 1 人でも多くの生徒に、短期間で最低限の読み書きを教えること。習熟度別にクラスが分かれ、初級では母語に合わせてウルドゥ語（ムスリム）、ヒンディー語、マラティ語を教え、ある程度の読み書きができれば上のクラスに、さらに、英語を習うクラスへと上がっていく。この日の英語の授業（2 ページ左下の写真）は、LIFE という NGO が配布している DVD ソフトをテレビで学習していた。毎日、朝の 8:00 から夜の 19:00 まで、約 40 人の先生が交代で教えている。日曜日は、新しく入ってくる生徒に対して簡単な試験を行う。先生は主婦が空き時間を利用してやっており、またこの学校の卒業生も多い。月に 300 ルピーの報酬をもらう。先生 1 人 1 人に勤務評価表があり、どのクラスの生徒を何人教えているか、また先生の評価なども書かれている。子ども達にも評定表（成績表）があり、非常に統制されている印象がある。

この学校のもう 1 つの特徴に出張授業（Outreach）というのがある。これは、働く子ども達のために雇い主の許可を得て、工場などに赴き、約 2 カ月間にわたり、数時間ずつ勉強を教えるものである。

非常に合理的でわかりやすいのか、ICICI 銀行やユニセフ（国連児童基金・UNICEF）などから支援を受けているようだ。これはこれで 1 つの有効な方法だとは思いますが、子ども 1 人 1 人をきめ細かく育てるというのとは対極にあるようだ。

3 月 2 日（水）

●午前 エレファンタ島



前日パイ氏（Dr.Pai）との雑談中に突然決まったのだが、この日は午前中にエレファンタ島に行くことになった。ホテルの近くにあるインド門から出ている船に乗ること 1 時間、沖合にあるエレファンタ島には 7 世紀の石窟寺院があり、シバ神などが彫られている。



毎年 1 度、月明かりの中で 3 日 3 晩コンサートが行われるという。いつかここで、コンサートがやりたいとパイさんに言ったら、「Next time」と言われてしまった。

●午後 BLP との話し合い及び会食

午後から BLP のオフィスに行き、後期分（2005 年 4 月～9 月）のお金を渡す。また、以前から頼んでおいた子ども達のデータ（コピー及び CD）も受け取る。半期（6 カ月）ごとに決算報告を出してもらうよう依頼し、前半期分（2004 年 10 月～2005 年 3 月）は 4 月上旬に送ってもらう予定である。さらに、BLP の年報・会報（Bulletin）を見せてもらう。BLP の年報の中では、「教育分野への進出」といった位置づけでモンスーン教室の報告がなされていた。2005 年 10 月はモンスーン教室のプロジェクト開始 1 周年にあたるため、それに合わせて訪印するつもりだということも伝えた。

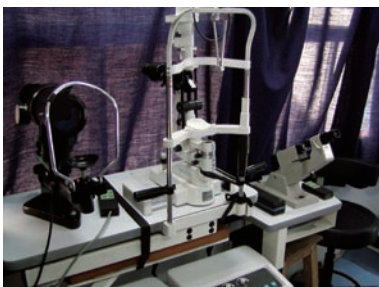
3 月 3 日（木）

●12:00 インド視覚障害者協会訪問

早朝に中島氏がデリーに発ち、この日から 2 人で残りの日々を生き抜かなければならない。正午に、ウォルリ・シーフェース（Worli Seaface）にある視覚障害者協会に赴く。いきなり見せられたのが、日本総領事館から寄贈されたという移動検査用バス 2 台。最新設備である。

次に会長室に上がり、ガンディー氏（Mr.Gandhi）と会談。京都府視覚障害者協会からいただいた木製点字器や簡易点字器を渡す。すぐに点字印刷の責任者ケータンさん（Mr. Ketan）がやってきて、インドの点字器をみせてくれた。日本のものより 1 回り大きい。昨年 10 月の和泉元彌公演のチラシをみせるとすぐに読み始めるが、日本語なので読めないのが残念だと言われる。ケータンさんは生まれつき眼球がないそうだ。

その後、施設内を見て回るがその立派さに圧倒された。まず点字はすべてパソコンで作成し、印刷も行う。点字作成ソフトはアメリカ製の JAWS というソフトを使っている。音声計算機は SONY と SHARP 製だそうだ。



インド・ムンバイ訪問 報告 (2005年2・3月)



また施設内には、テープライブラリがある。テープの利用者は10ルピーを預かり金 (deposit) として渡し、テープを借りる。テープの返却の際にはチェックを行い、テープが損傷していたら、30ルピーを支払う。ここには何千タイトルものカセットがあり、9カ国語 (Hindi, English, Marathi, Urdu, 他近隣地域の言語) で作られている。このテープを作るための録音施設、ダビング機、さらにはCD作成機などもそろっている。

日本総領事館からかなりの支援が入っているようだ。ともかく施設の立派さに圧倒される。



3月4日 (金)

● 10:00 VOICE 訪問

いよいよ最終日だ。今日は朝から別の識字教育を行っている NGO、VOICE を訪問した。VOICE は活動を始めて14年、初めは駅の構内で学校を始めた。ムンバイ市内のダーダル (Dadar) 駅などで10年間、青空学校を行った後、現在の場所に移って来た。VOICEの主宰はビクター氏 (Mr. Victor)。たとえ子ども達が路上生活を行っていても、人間としての尊厳を失ってはならないこと、人間らしく生きること、自立した個人として生きること为目标におく。このホームは本当の意味での「家庭」であり、挫折したときや何か苦しいことがあったとき、いつでも帰って来られる場所でありたいという。単なる教育ではなく、共同体として生活のあらゆる面をサポートするのが目標である。

現在このホームには、数人の男の子たちが一時的なシェルターとして滞在しており、先生もここに寝泊まりして生活全般を支えている。女の子のシェルターは、別の場所にある。学校に行きたい子は公立学校へ行くことを支援し、学校に行きたくない子はここで学力面をサポートする。進学する意思の強い子には、必要な公的な試験 (大検みたいなものらしい) を受ける準備をさせていた。

このビクター氏は、音楽が好きなようで、ハルモニウム (Harmonium) と呼ぶアコーディオン形式のオルガンを弾きながら、英語の歌、英語の賛美歌、ヒンディー語の賛美、サンスクリットの賛美などを歌ってくれた。歌は心が明るくなるから良いと、言っていた。

他にも、オランダ人の先生がリコーダを教え、加藤先生は少林寺、他にメヘンディ (※1) 教室などもある。非常に家庭的な暖かい雰囲気を感じ、また、音楽を通して光の音符との交流の可能性が考えられるため、再度訪問したい場所だと感じた。昨年、マイソールシアターでのコンサートや、ダラヴィ (Darhavi) のミニコンサートを覚えている子達も大勢いた。(※2) 「あのとき会ったよね」って言われ、〈ぞうさん〉を歌い出したのにはびっくり。

モンスーン教室の訪問でも再会した子ども達を見て思ったが、このような活動はやはり、1つ1つの小さな出会いの積み重ねの上に成り立つのだとしみじみ感じた。

● 日本への帰国の途 23:50 ムンバイ発

14:00 にホテルをチェックアウトし、メタさん宅へ移動。小休憩させてもらう。

夜中にムンバイを発って日本へ。

3月5日 (土)

5:30 バンコク着 / 9:10 バンコク発 → 16:15 大阪関空着



※1 ヘナという染料で手のひらや手首、腕に模様を書くもの。もともとは花嫁に施す装飾
※2 2004年2月、私たちはVOICEの子達と上記2つのコンサートを共演している